三

つれ〳〵睟か川

へ違13
1928
4

但馬
伊屋吉左衛門
湯嶋

但馬
伊屋吉左衛門
湯嶋

つれ〳〵睟か川 三之巻

建仁寺の陀羅尼。さうゐ表もなく大和
橋の石ずゑ中までのこ。たゞ通ふなさけひとつく
かりしろききをぬるべし。けはいといふ
ふかりし後。紅ところなすれどとて。七日
十日も居続けハ。否ぬ宿もこえずして
初いその月るしこそ多かるべけれ。あゐ

とうをれうのの多ハ。まきのかるものしじ
名と何さらめ。賀るこ寿ろう指のあそび
たゝれ祖、そ家体合この色そ。しけゝ
く夜起て加ゝるものさらるふ。茶やかど
久しう加るものハ何らど。亜茶方れ蓄
六ワ切。店方の耳酒壺ゆれも方ぞし
茶屋の初夜ハ宿の夜ま。こんはゝ。
夜ゝるこそうけようべりる。けるさ尚世の

生瞬者は。早うかつゝバ汐の示え来西し
と汲ふもたゝれ推量情事。和迂ゞ来て
もまゞ合点せど。祢むさゞつてゐる蚊ざ
けをて祇園清ものあさまわり。飯ハ
二形茶屋れ紙子焼。よゞ祢ゞふ酒さ
のこゝるゝ抜ゆんどんのるい西ぃまれ
豆腐の胸をゝ。ゝちるうゝの
茶屋ゝ立ゝまで。ゝや四ワるれ日らげ

肴戸みかんかき。漬の物乾ふ穂ぬけ
ゴ漬物のゴ
茶ゑも食ぬ泡。豆ふなつてハたまぬ
とうちへりうるんのくるーさ。中戸ロ
うをけと這入ハ。食槌のうへふ賠乃
漆てなるも。泡ゑ味ゑるさとものなり
蕪子ハ多ぬめでゴかゑんと物好しハ

昔のゴ。當世ハ蕪ゑゑもあゑるも。首ぬ
めでゴゑん串を厠ゴ。瓜ふ糸みちぬあ
ゴふうすくても。耳のゴし詩ふ花だこの
濃ゑるハ。そゑゑが金魔ぬ志るゴなるゴ
さゑゑで白人といいゑんゑもむゴろ
蕪子といゑゑんゑものゴ。妙の高麗碧。小
女ゑの縁仕入。ゑゑ三法もゑゑんてゑ
ぬ川。ぬくゑ山。二ワ三ワのゑゑものふて。汐

一万

八度てまり果報ゑゝこと。扨養蠶の後
搗米の彩花。まづ後搗米といつて。麥
飯の水ほげんそれもあつお煮のおま
さりえんして。まゝこゝ仲ふもさるくいつり
あつの出し合親方れうこみ。又八婦分
涼切なるあつなど彩てこてこゝふも有
玄迄まくまつ是うまてこてゆる
あハ。ちと世まのゆゝふもこゝれど。まづ

家ゝハ中暑の彩。うの水とといつ訴と
江戸しての中なゝバ。あさまかゝやゆふ
さゝぐし。ちゑれ強坂う後搗米れあ
といつと。こワゝ子ゝ彩植れ矣すもるゆう
ふぞゞがゝこゝていやうるものこゆるさと
もうりこれは。石暑ともたハけとも
金江ふゆゝべのあゝ彩し。彩仕也部
屋へ寸壽てハなんゝこゝげのぞんの抑る

めうせうよりてかされ。金銀さゝひか
ゝなるをどゝさいい寶じやといふこと
でうりて。ゑんハうちもゝ瓜ばりよまふまの
慢いしやないう。貯ゑの毎日おう。極まゝこ
いよ財産とゝめるゝ。おいひごゝ分くさまざ
うを。ものへもまゝ拾てそゝゝれ新ゝ吹
ハ面うなんさのいや汐干ふいさまゝちゝの
のとゝふゝるまいふまもゝ平樂遊てゝるを

そゝ思へともたゝ遊もんゝむなしじや
いるまいう。学さゝるのハどゝさゝやつゝごう
のかゝれといよ俗う。今春ハ見世ふいう
祢ばなゝめ。なゝどく語るも里れをひ
想して藝子の注文ハ。花車が清とる
伴人役。まゝ枕掛お意ふかゝ色バ二度
めハゝや次の間の座敷ふ敷のなる
ゝふたゝして口説俗商ひ。性仕道ふ

よつてかゝること。孕迫産際因縁はなは
だ。急ふ祈んさいれてのお射。治ふ方迫
津いとまをもとめてはなれ大ゝなる
園のひろ。そはれうに出て。快
とやうをおもく。もやうやくそく
成たのむ法まする而ハ節をはむしん
ま滅のあひうひハ方方はあひ。梯舞
かゝ梯は余波いてをこせで。否ともいく

ゝ。又ゝ方ゝ附合者てハまんざら
ふ生産ゝ。ゝ方ゝ神表もるこ。四ゝもすゝ。宿おまひの
後迫ひゝ来ても。留ゝハ去ともかゝ。い
なゝゝゝ。ゝ粧とある産かれ。こゝすゝ
ふ月ふ孕は大雑而。蕨ゝ積つて福の
程。唯は まひの一ゝ中ゝゝゝきのゝそ
老ゝるも若ゝも智ゝるも面ゝるも

かりることなしとぞいへり。さまして藝子
のもちし三弦の糸までハ。入歯ともよく
たなびき。藝子ハ筋得る引摺下駄のおと
小も小むすこもかまへば操出さぬとぞ
誡めおそるべきハこのまどひなり。何がし
とやいひし茶門の。茶屋ハだん〳〵諸子
の噺小三弦弟の退てけるハ。余所まで
も気毒なはなしやといひしとそ。さもお

がえぬべりき
人の心迷ひとなる色欲にハ志かじ。その油
となる佐平治となる。いぬそれくのより不宥
て中諸のせりふ。若諸わのかりこう。於諸
の落涙まで。思ひくらべ色かせざ。さ
まじ色里は破ひハ万代不易こり
がてくと引摺ひきずり下駄。ざいく

となり迄る白一挑灯。ハイ。ふいせさん
ゆげますと。彼男の茶ぢゃう茶箸
の祝儀をつくさうに。ゆげまは
での待取渡し。茶車ぐさづふ家へ
おいでと。あたくしの奥さたくけど。ヲ
ちんどいふて。ぶるまでゞ發端。あふも
又さるくの癖あつて。ゆくちやまし者
むまいひ。古辛楽。男自慢。せうぬがり

拍いくば。長床。鼻の大さゑまで。ゑく
の臺家ど。是やどの者ハ何
れ拍うハ。まことに法ゝ記はとゝいふハ
四季折くれやくそく日がゝ。あらぐうゝ
道ゑもなくば。婦人の引まハ法ゝ者
の宴を。加合の賞嗜。富や中と指四
乃男の心ぢけ。髮結ゝ。梅磨かゝ
ゑ間拍屋。貸布屋の拂まで。第ゑませ

ぬ間流のやまくゝ。ゑゑゑゑふいまてゝと
おりゑあでも。喜人などいひ出ゝと。ゑふ
むゝ雲。月ゑ風。喜ハ柳ごゑふ行拂
ゝゑで。法ゑうゝくゝもいひ出さゝど。い
流くゝの心をひ。婦のんあゝばゝ十人
ず十人。ゑゑゑゑゑ見れ家ゝゑなゑバ
拂ゑゑハかゝふもいゝゑ。因流の福で
引ゝ居ても。寢まさゑゑゝ見拂見四

家ゝ其ものちが面世のいてゞ。やく者くの
揚屋遊ゝ。面番其姿ハおもひ付ものゝ
ゝ。はうちゝ百人の者。三人の男まと
いふ事ゝ有るゝさまるべ。只其ハ一人
の実をたくすなゝひおもぐ。まとも
しゝ。まゝ彼の分れうハ格別
其婦ゝ有て。家ゝ其実のたゝひゝハ
おやまふゝて絶対ゝ出るべ。すべて

只の祝儀の事ふハ。一撥ふおやまハ
歌をゝものゝ。切かりそゑの口癖ふ
も彼ハたくゝ面をゝものゝやなゝ。耳
口形美見てハ。今れむすとは合せ
を。昔ゝよりおもの嘘ふて分を美ひ
まる者ハすくれく。彼の実をたくせ
者ハ。大ゝ分俳ともゝまゝものなり
只嘘なゝをおちるゝを。実なゝ

懼を惜むべきものなり。若かく行ひ
ハ佛の方便。おそれ給へしきものハ蛇の
害とゝ成べく。この害ふ噉されぬべきふ
るゝ先驛の寺一。趣て狐ハ化る
ものとゝ成べく。噉とゝ雨ハ共に行
ゆさんして狐しかまるものなり。きつね
の噉るものをきゝたる。おやまふ害ゝ成る事を
懼をさる人ハ。いかを思味なり。いかゝ

仏人といふべく名茶の祝仁ハ。女の脛の
白きを見て通ゝ行うしなひうん。そもそ
ゝ匂ひなゝ行かりけるものなるべし。な
しと引箭は法よきむしの撮。今附
野者と云べく小島子。蛇の色の白い
ゝ為べく。通のたんゝ様さ様をも考よ
ものゝ行ゝ。只噉の中の実の一事
なり。永伴をもおやつゝ形ゝ。実をもつて

見まこと。たゞ目さまかさとおのゝさとゝさハ
ぱをしく河房ら〳〵けまと。月を見
てよくく思くこと。色ハ蛾眉のはよ花
形をくしゝ。ゝかく志賓情ゝさ蛾ふ
出合さハゆゝ重表ゝ不結合となんゝりる

つゝく瞬ゥ川畫ゝ三終

湯島
中屋甚右衛門